

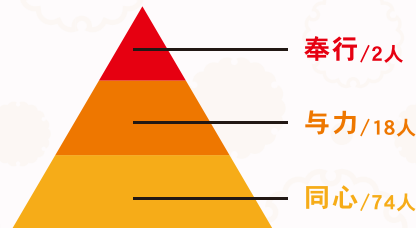
浦賀奉行所 主な出来事

和 暦	西 暦	出 来 事
享保 5 年 12 月	1720	浦賀奉行所開設 伊豆の下田から移設
6 年 2 月	1721	船改め（積荷と乗組員の検査） 始まる
寛政 5 年 4 月	1793	老中・松平定信 海防強化のための 視察に来る
文化 7 年 2 月	1810	会津藩に浦賀周辺海防を命じる
文政 元年 5 月	1818	イギリス商船ブラザース号 浦賀へ 来航
文政 3 年 12 月	1820	会津藩江戸湾警備を免ぜられる 浦賀奉行所が引き継ぐ
文政 8 年 2 月	1825	異国船対応策が「異国船打払令」 （無二念打払令）に
天保 8 年 6 月	1837	アメリカ商船モリソン号来航 平根山から砲撃
天保 13 年 7 月	1842	異国船対応策を「薪水給与令」に 戻す
弘化 2 年 2 月	1845	アメリカ捕鯨船マンハッタン号 漂流民を乗せて浦賀に来航 特別措置として漂流民の浦賀上陸を ゆるす
弘化 3 年 閏 5 月	1846	ビッドル提督率いるアメリカ軍艦 コロバス・ヴィンセンス号来航 与力・中島清司ら軍艦の必要性を 説く
嘉永 6 年 6 月	1853	ペリー提督が蒸気軍艦2隻・帆船軍 艦2隻で浦賀沖に来航 久里浜で浦賀奉行がペリーから アメリカ大統領の親書を受け取る 洋式軍艦・鳳凰丸の建造始まる
9 月		
嘉永 7 年 1 月	1854	ペリー提督 2 度目の来航
安政 6 年 6 月	1859	神奈川奉行所開設 異国船応接の役 割を浦賀奉行所から移譲
安政 7 年 正月	1860	咸臨丸 アメリカへ向け出港 浦賀奉行所与力・同心らも乗船
万延 元年 閏 3 月	1860	桜田門外の変での浪士探索のための 海上警備強化
5 月		咸臨丸 太平洋横断の航海から戻り 浦賀に寄港する
12 月		14 代将軍・家茂が上洛の途中浦賀 へ寄港 上陸
慶応 4 年 閏 4 月	1868	新政府 浦賀奉行所を接收

浦賀奉行所の人々

浦賀奉行所では、主に奉行、与力、同心の役職がありました。幕末には、これらの役職の人々以外にも含めて、200人程度が働いていました。

浦賀奉行所の職制(天保10年(1839)当時)



浦賀奉行所の主な役人

奉 行

- 堀 利喬 最後の下田奉行として移転先を浦賀に決めた。
- 太田 資統 モリソン号事件で異国船への砲撃を指揮。東京湾に備えられた大砲が外国船へ向けて実弾を撃ったのは、太平洋戦争が終わるまでの約130年間でこれが最初で最後。
- 戸田 氏栄 ペリー来航時の奉行として、親書を受け取った。

与 力

- 中島 清司 中島三郎助の父。海防強化策として軍艦導入を提言した。
- 中島三郎助 日本で最初の洋式軍艦・鳳凰丸建造の主任。桂小五郎が弟子入りした。函館で2人の息子と戦死。
- 香山栄左衛門 ペリー来航時に大活躍。ペリーからの信頼も厚かった。
- 佐々倉桐太郎 鳳凰丸建造で活躍。咸臨丸でアメリカへ。維新後は沿津兵学校で教鞭をとった。

執筆：山本 詔一（横須賀市文化行政専門委員）
発行：横須賀市文化スポーツ観光部企画課
文化振興課

〒238-8550 横須賀市小川町11
電話：046-822-8116（文化振興課）

平成30年4月発行

浦賀奉行所

URAGA MAGISTRATES



「浦賀湊番船漂着図」国立公文書館所蔵

2020年 浦賀奉行所開設300周年

浦賀奉行所とは

I 浦賀奉行所の誕生

享保5年(1720)12月、伊豆の下田にあった奉行所を移転し、新たに浦賀奉行所が設置されました。下田から浦賀に移転した公式な理由は「下田は港の出入口に岩礁があって、船の入出港の妨げになっている」という船乗りたちからの声を聞き、より安全な湊を求めたからといわれています。

しかし本当は、江戸幕府が開かれてから100年間、大きな戦乱もなく平和な世の中であったため、生産力が向上して全国各地から江戸へ様々な品物が入るようになり、江戸に入る物資の98%以上を占めていた船による荷物を、ほぼ完璧に検査できる場所を探した結果、すでに湊として整備されていた浦賀が選ばれたのです。

II 浦賀奉行所の役割(江戸へ出入りする船の検査)

浦賀奉行所には、船の積み荷と乗組員の検査をする「船改め」を行う船番所が開設されました。この船改めは「廻船問屋」と呼ばれた105軒の問屋に委託されました。江戸へ出入りする全ての船は、浦賀で改めを受けることが義務づけられ、船の関所の役割を担っていた船番所では、「入り鉄砲に出女」の検査はもちろん、生活必需品11品目の出入りの数が3か月ごとに江戸町奉行に報告されていました。

III 浦賀奉行所の役割(異国船の警備と応接)

浦賀奉行所が開設されて100年となる19世紀初めには、異国船が浦賀沖へ来航するようになり、奉行所に異国船への警備と応接の役割が追加されました。嘉永6年(1853)6月、浦賀に来航したペリー艦隊は、日本が近代に進む第一歩としてよく知られていますが、浦賀奉行所にとっては、文政元年(1818)5月に来航したイギリス船から数えて7度目の異国船の来航でした。

このペリー来航時には、中島三郎助や香山栄左衛門をはじめとした浦賀奉行所の役人たちが大きく活躍し、交渉の結果、アメリカ大統領の親書を久里浜で受け取ることになりました。

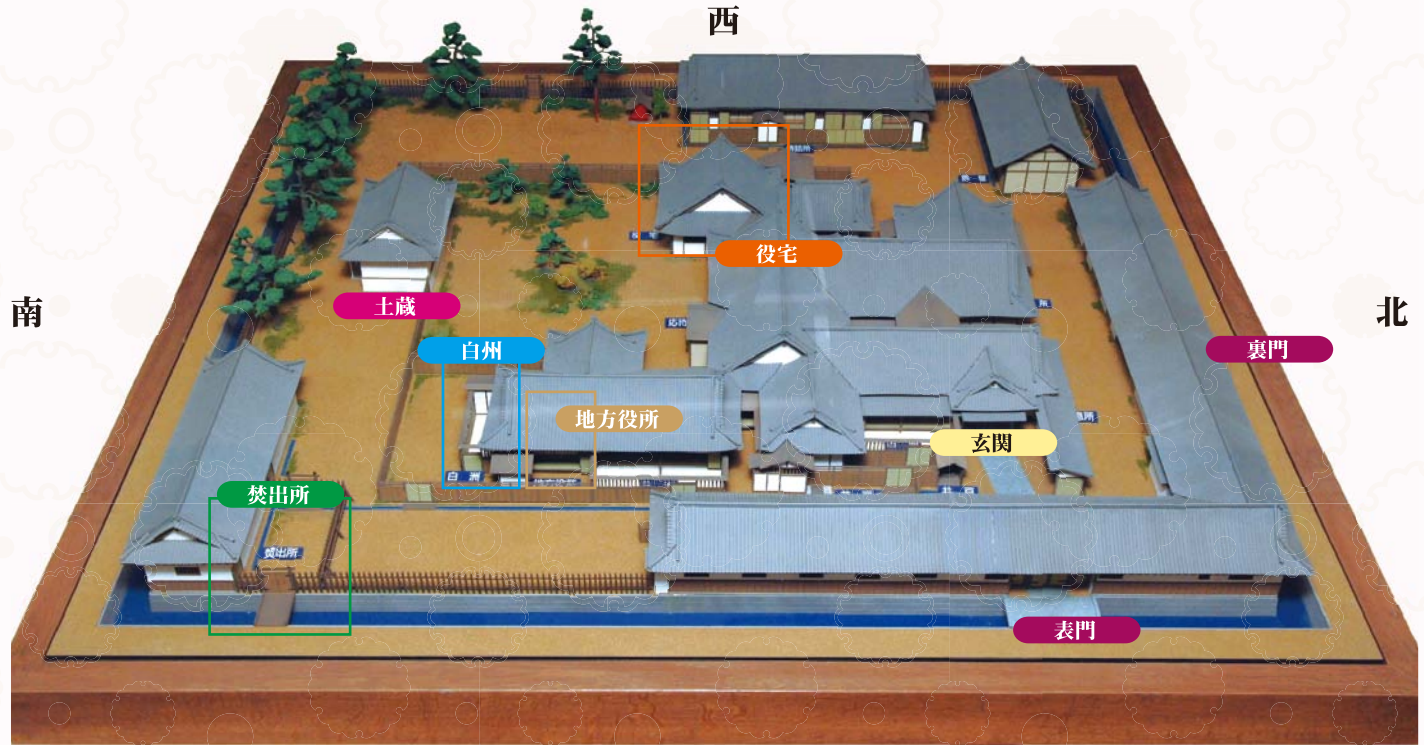
IV 幕府海軍と浦賀奉行所の廃止

翌年の嘉永7年(1854)1月にペリーが再来日して、日米和親条約が結ばれましたが、その頃浦賀では、日本初の洋式軍艦「鳳凰丸」が建造されていました。安政5年(1858)6月に日米修好通商条約が結ばれ、翌年に横浜が開港されると、異国(船)の応接は浦賀奉行所から神奈川奉行所に移されました。

しかし、浦賀奉行所は、開港後も引き続き「船改め」の役割を続けるとともに、鳳凰丸建造や軍艦の修理など、幕府海軍を支える重要な役割を果たしていました。安政7年(1860)咸臨丸が浦賀から出港した時も、浦賀奉行所の役人が乗船してアメリカへ渡りました。

浦賀奉行所は、慶応4年(1868)閏4月、新政府軍に接収され、「船改め」以外の仕事を終わりました。「船改め」の仕事は明治5年(1872)まで続けられました。

浦賀奉行所 見取図



浦賀コミュニティセンター分館所蔵

浦賀奉行所は、周囲を堀で囲まれ、東面北側に表門、北面中央に裏門がありました。敷地の中には屋敷、焚出所、土蔵などが置かれ、さらに屋敷には玄関、白州、地方役所といった執務の場のほか、日常生活の場(役宅や台所など)も置かれていました。

焚出所

異国船が来航すると、奉行所の役人をはじめ、奉行所の船を操船する近隣の漁師は24時間体制になるため、その役目について人たちにご飯などを炊きだした場所。奉行所の門を通らずに出入りすることができました。

白州

奉行所で法廷が置かれた場所。しかし、裁判ばかりではなく、町人や農民などに通達するときも白州が使われました。浦賀奉行所では灯明堂の白砂が敷かれていて、汚れると新しい砂と交換しました。

地方役所

「じかた」役所と読み、年貢の徴収や土地制度、民政に関する政務を行っていました。

役宅

奉行が2人体制になった文政2年(1819)以後、浦賀詰め(在地)となった奉行が居住した場所。文久2年(1862)までは、在地の奉行は単身赴任であり、奉行の周囲には秘書役の用人と警備役の目付が数名ずついました。

浦賀奉行所跡 地図

